6. 10. 31
佐倉市 教育センターだより Vol.64
令和6年10月31日発行／佐倉市教育センター／TEL.043(486)2400　https://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/kyoikucenter/index.html

日ごろからできる小さな配慮

佐倉市教育センター所長　神成　裕尊

先日、家族と一緒に普段は行き慣れない洒落たパスタ屋へ行ったときのことです。卓上には古びれたメニューがあり、パスタやピザ、サラダやデザート等が、斜め書きのフォントで文字のみで書かれてありました。私はメニューの一つ一つに目を通し、どのパスタやピザを食べようか考えていました。ところが、いくらメニュー表を見てもなかなか決められません。どの料理名や説明文を見ても、結局、どんな外観や味かあまり想像がつかず、パスタやピザの全体像が浮かばなかったからです。すると、高校生の息子が不機嫌そうに言いました。「このメニュー、全然わからない。なんで写真がないの？」と。なるほど。写真があれば、一つ一つのメニューに書かれた説明文が生きてきますが、写真がないと全体像が見えづらく、どんな料理かも理解しづらいと思いました。写真一つあるだけで、読み手の受ける印象はこんなにも違うものであるのかと感じました。

例えば、これが私の得意なラーメンならば話は別です。メニューに写真がなく、ラーメンのスープや具の説明だけが掲載されていたとしても、そのラーメンがどんな外観でどんな味であるかは、ある程度想像できます。しかし、今回は初めて入るお店で、メニューに説明文しかなかったため、我が家はメニューを選ぶのに時間がかかり、楽しい雰囲気もなんとなく興ざめしてしまいました。

学校の教育現場においても、上記の例でいうメニューの写真にあたるもの、つまり視覚支援があることにより、先生の説明だけでは授業の内容を理解することが難しい子供にとっては、目で見ることにより外観がわかり、具体的な用途や手順を理解し、見通しをもって取り組むことができるようになるかもしれません。

私たちが接する全ての子供たちは各々に個性や特性があります。学校は、全ての個性や特性に対応した指導や支援は難しいかもしれませんが、特に配慮を要する子供には、日ごろの授業や関わりの中でちょっとした工夫や配慮をすることにより、指導内容や説明事項を理解し、やるべきタスクをスムーズに行うことができるようになると思います。

私は教育委員会の職員として、佐倉市のみならず実に多くの学校を訪問しました。ある授業では、説明や設問の中に子供に親しみのあるキャラクターや学校の先生を登場させることにより、集中力を持続させる工夫を凝らしていました。ある先生はゲーム形式の活動を行う際、負けることがあることと、負けた時はこのように悔しがろう、というような悔しがり方の練習を事前に行っていました。また、自分の学級の子供の特性として、間違った行動や失敗から学んで正しい行動に修正することが難しい場合には、なるべく失敗しない、あるいは間違った行動ができない環境を整え、成功体験を積み重ねて指導内容を定着させるようにしていると語る先生もいました。他にも、忘れ物が多い、急な予定変更でパニックになる、相手の話を聞かずに自分のことばかり話してしまうといった特性を有する子供たちは少なくありませんが、先生が保護者と確認し、個に応じた特別な支援や配慮、工夫を凝らすことで、このような特性のある子供たちが少しずつ成長していく事例を何度も見てきました。

このような特別な支援や配慮、環境整備は一朝一夕にして整えることが難しいかもしれません。しかし、日ごろから特別な支援の在り方についての校内委員会や研修を行うことにより、子供たちが学校生活において不安やストレスを感じたり、時としてパニックを起こしたりするときの対応を学ぶことができると思います。全ての子供たちが先生方の丁寧な指導や支援により、少しずつ、しかし着実に成長できるように願っています。

特別支援教育に関する研修会を行いました

教育センターでは、特別支援教育を推進するために、各学校における支援体制の整備充実等に努めています。そのために、教員の特別支援教育に関する専門性の向上を図る研修を実施したり、特別支援学級に在籍している子供の学習や生活の支援を行うため、特別支援教育支援員や看護師を、各学校に配置したりしています。

7月には、子供たちに関わる職員の専門性のさらなる向上を図るため、以下の研修を行いました。

7月19日 特別支援教育支援員研修会

「特別支援教育支援員」として子供たちを支えるためにできること

～障害特性とその支援の仕方～

対象:特別支援教育支援員
講師:聖徳大学　秋山 篤 教授

1「特別支援教育支援員」の具体的な役割について
　①日常生活の介助　②学習支援　③教室間移動の付添い
　④健康・安全確保　⑤学校行事における介助
2 障害の特性について
　① 知的障害　②ASD　③ADHD等
3 知的障害、発達障害の二次障害について
　①自己肯定感の低下　②不登校　③暴力
　④反抗性障害　⑤自傷行為　⑥うつ病

参加者の感想より

- 子供が抱えている困り感は、本人の性格によるものなのか、特性によるものなのかを分けて考えることで、支援の仕方が変わることを知りました。
- 子供を支援するだけでなく、その子の自立につながる支援になっているかが重要であることがわかりました。

7月19日 看護師研修会

学校に勤務する看護師について

～医療的ケア児に看護師がつくことでどのようなことができるか～

対象:看護師(医療的ケア児対応)
講師:千葉市養護教育センター
　杉本 景子 スクールメディカルアドバイザー

1 安全安心な医療的ケアに向けた校内の役割について
　文部科学省の資料により確認
2 学校における医療的ケア等の現状について
　看護師同士で情報交換
3 困りごと等に関するディスカッション・質疑応答

参加者の感想より

- 学校現場で勤務する看護師の立場や業務内容について、学ぶことができました。
- 看護師だけでなく、学校全体で共通認識の元、組織として対応する必要があると感じました。
- 看護師と教職員の双方がその専門性を発揮することで、児童生徒の成長・発達を最大限に促すことができることが分かりました。

7月29日 特別支援教育夏季研修会

ことばの教室に通う、もしくは通っていた児童・生徒の理解

～吃音がある子供が幸せに生きるために～

対象:学級担任・特別支援学級担任
講師:千葉市立松ヶ丘小学校
　渡辺 美穂 教諭

1 吃音とは（話し方の特徴　連発・伸発・難発）
2 ことばの教室での吃音学習
　① 吃音理解　②吃音がある自己への理解
3 吃音がある子供に必要な「首尾一貫感覚」とは
　【わかる】当該児童が自分の吃音について客観的に把握する
　【できる】自分が吃音でもなんとかなると思える
　【意味がある】困難な出来事は、自分の人生において意味があることだと感じる

参加者の感想より

- 吃音は原因や治療法が不明であること、どもらなかった時に褒めることは逆効果であることを、教職員に共有します。
- ことばの教室では、先生と当該児童の対話がいかに大切であるかを学べました。

研修を通して、子供に関わる様々な立場の職員が、それぞれの専門的な知識や技能を学ぶことで、今までの自分の指導方法や支援の仕方を見直すきっかけになりました。

これからも、専門的な知識をもって子供たちの教育的なニーズに合わせた指導や支援ができるよう努めます。

第１提案　佐倉型カリキュラム・マネジメント～教職員と児童生徒の変化～

佐倉型カリキュラム・マネジメントとは

【主な取り組み】
週時数の削減
下校時刻の見直し
教育課程や行事の見直し

ねらい

- 教職員の教材研究を充実させ、質の高い授業を提供
- 児童生徒と丁寧に向き合う時間を確保
- 中学校では、最終下校時刻を見直し、安心・安全の確保
- 放課後の時間を充実させ、自己の伸長と家族との交流の機会を増やす

教職員の意識の変化

佐倉型カリキュラム・マネジメントを実施して、実際に取り組めるようになったこと

	項目	全体の割合
No.1	授業準備・学習指導	57%
No.2	事務処理(調査・報告等)	37%
No.3	学習評価(成績処理等)	31%

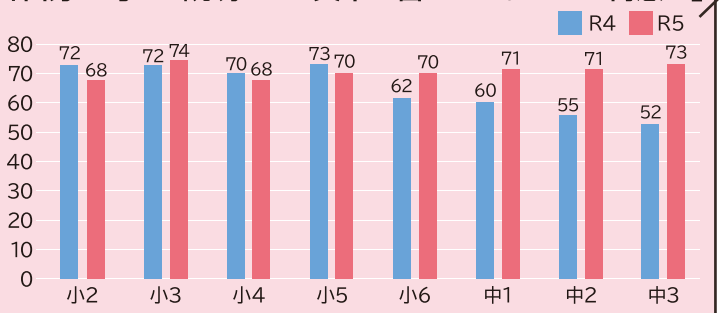
佐倉型カリキュラム・マネジメントの実施により、教職員の意識の変化において、主に３つの成果がありました。

① 教職員の在校時間が全体的に減少している傾向にあることがわかりました。
② 放課後の時間ができたことで、授業準備に充てる時間が増えたという意見が多くあがりました。
③ 佐倉市学習状況調査から、教職員の授業や指導方法における意識の向上がみられました。

課題は、授業時数の確保、業務量の改善等の意見があがりました。

児童生徒の変化

「自分の考えを説明したり文章で書いたりするのは得意だ」

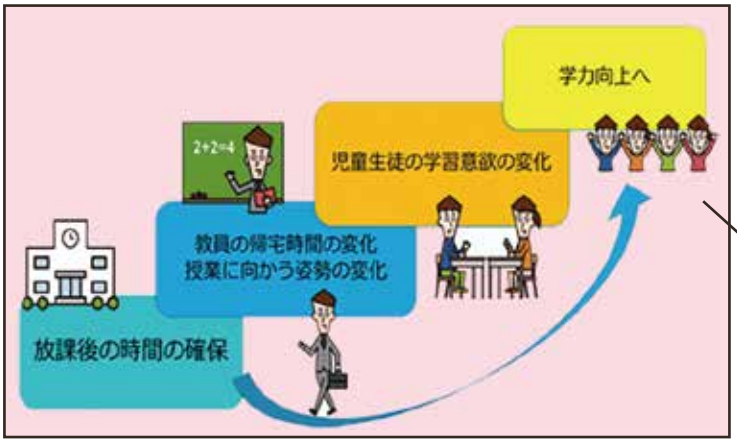


「自分の考えを説明したり、文章で書いたりするのは得意だ」という設問において、多くの学年において数値の向上が見られました。特に中学校においては、10ポイントから20ポイント近くの大きな上昇が見られました。

他には、「自分の考えを説明したり文章で書いたりするのは得意だ」等の項目において、児童生徒の学習意欲に肯定的な変化が見られました。

児童生徒の学力においては、全体的に大きな変化は見られませんでした。学力は時間をかけて検証していく必要があると考えます。

佐倉型カリキュラム・マネジメント　まとめ



今回の調査により、先生方の放課後の時間に変化が見られたことがわかりました。

放課後の時間が以前より増えたことで、教員の帰宅時間が早くなったり、授業に向かう意識や姿勢に変化が見られたりしました。

また、児童生徒の学習に向かう意欲や授業に対する考え方の一部に肯定的な変化が見られました。

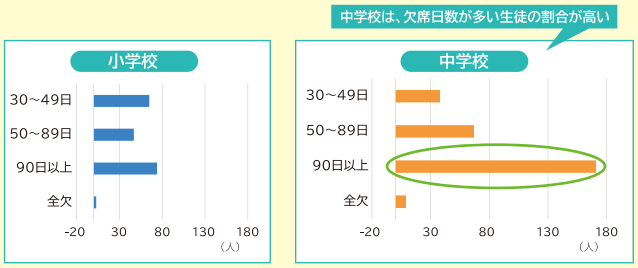
学習意欲と学力は相関関係にあることから、今回の児童生徒の学習に対する意欲や意識の変化は、時間は要しますが、最終的に学力向上につながると考えます。

第2提案　佐倉市の不登校の現状と不登校支援について

佐倉市の小・中学校における学年別不登校数の推移や、欠席日数別の不登校の要因、不登校児童生徒の居場所について、教職員を対象に調査をしました。その結果をもとに、佐倉市の不登校支援の充実を図るため、支援の方向性について考察し、報告をしました。

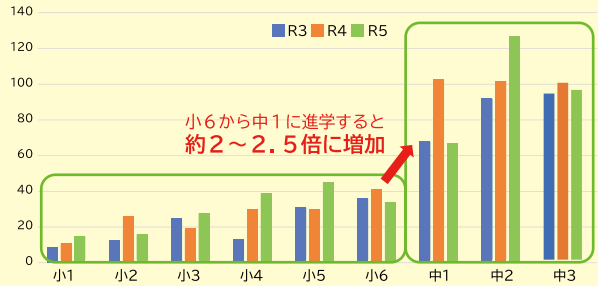
不登校に関する調査結果より　～データで見る佐倉市の不登校の実態～

欠席日数別の不登校児童生徒数



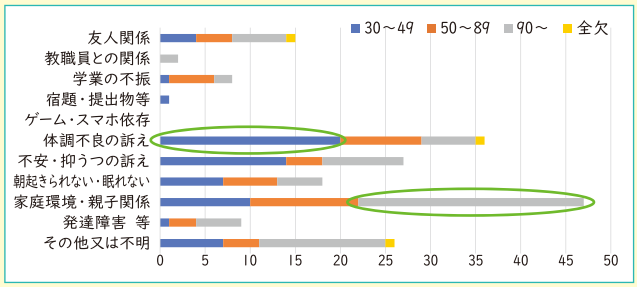
不登校児童生徒の中には、週3、4日登校している子もいれば、全欠に近い子もいます。小学生の不登校児童は比較的欠席日数が少なく、中学生の不登校生徒は欠席日数が多い傾向が見られました。

学年別不登校児童生徒数の推移

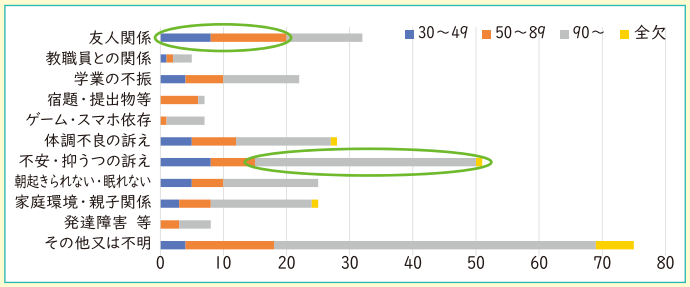


不登校児童生徒数が、小学6年から中学1年に進学する際、倍増することがわかりました。「中1ギャップ」を、小中学校それぞれの教員の立場で考え、小中の円滑な接続を意識する必要があります。

欠席日数別　不登校のきっかけ・要因(小学生)



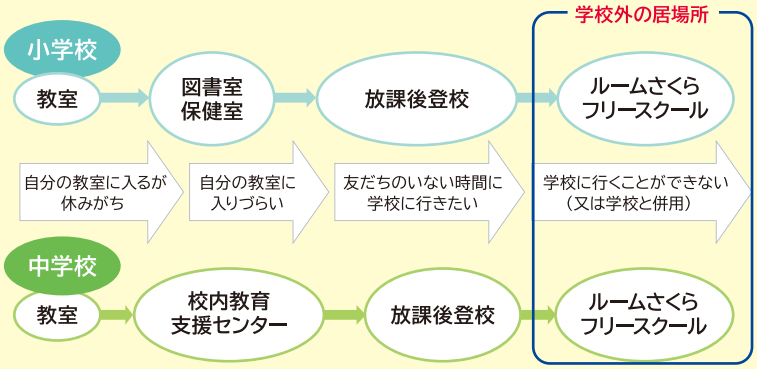
欠席日数別　不登校のきっかけ・要因(中学生)



不登校のきっかけや要因は、校種により大きく異なりました。小学校では、欠席日数が30～49日の場合、「体調不良の訴え」が最も多く、欠席が90日以上になると「家庭環境・親子関係」の割合が増えました。

中学校では、欠席日数が30～89日の場合、「友人関係」が多く、欠席が90日以上になると「不安・抑うつの訴え」がとても多い結果となりました。初期段階として、小学生は「体調不良」、中学生は「友人関係の悩み」で欠席が続いた時が、不登校のきっかけとなる実態があることがわかりました。

欠席日数が増えるにつれて変化する不登校児童生徒の居場所(多様な学びの場)



まとめ　一人一人の居場所を見つけるために

不登校の時期や段階、本人の特性等により、本人が自分らしく過ごせる場所は異なります。校内教育支援センターや佐倉市の教育支援センターである「ルームさくら」は、教室への復帰を目指す一時的な場所ではなく、子供がずっと居てよい場所です。一人一人の登校スタイルを大切に、リラックスして過ごせる環境を目指しています。

「不登校は誰にでも起こり得ることで、決してあなたが悪いわけではない」というメッセージを発信し続け、子供たちの未来を支えていきたいと思います。